

2018年8月21日

立教大学国際学術研究交流制度
2018年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	有本 真紀
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Associate Professor, Department of History, Washington State University 所属機関所在国：米国
	氏名	William Puck Brecher
招へい期間		2018年6月22日～2018年7月22日（31日間）
研究経費		744,690円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2018年6月22日	来日
6月23日	リサーチ・イニシアティブセンター、図書館案内 滞在期間中のスケジュール、研究計画の確認
6月27日	大学院文学研究科「教育学演習3」講義（出席者9名） The history of “individuality” in the Edo period
7月4日	大学院文学研究科「教育学演習3」講義（有本担当）への参加とディスカッション 日本の近代化と音楽—学校唱歌を中心に—（出席者9名）
7月4日	研究会—招へい研究員 William Puck Brecher 氏をお迎えして— Historical overview of the Western individualism vs. Japanese collectivism paradigm and its problems: A history of kosei in the context of private and public 主催：教育学科、場所：文学部人文研究センター（出席者：10名）
7月5日	「個性調査簿」一次史料の情報提示、有本科研課題に関する研究討議

7月11日	大学院文学研究科「教育学演習3」講義 A history of “individuality” in the Meiji period
7月14日	「個性科研」*研究会 「日本における『個性』の成立と展開」 *17K04712 基盤研究(C)「個性」の成立と言説編成に関する歴史社会学 — 「個性調査」をめぐるポリティクス— (代表者：有本真紀) Brecher 氏発表題目：Individuality as Leisure in the context of the Meiji period – Based on the history of “kosei” 場所：5号館第1・第2会議室 (出席者：30名)
7月20日	招へい期間中の収集文献に関する研究討議 今後の研究交流に関するディスカッション
7月22日	離日

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層(学生、大学院生、一般、教職員等)、会場の様子なども記載してください。

この招へい期間中に行った主な活動は、①大学院「教育学演習3」における講義と議論、②人文研究センターにて開催した研究会、③科研課題による研究会、④「個性」関連史資料の共有と議論であった。

①の「教育学演習3」では、3回シリーズで講義と議論を行った。第1回(6/27)は、個性概念の定義を示したうえで、江戸時代における個性類似概念、自己の形成にかかわるトピックを、画像史料を提示しながら議論した。ときおり日本語を交えての講義で、大学院生も積極的に質疑応答に加わることができた。第2回(7/4)は、有本による講義を中心とし、音源資料、キーボードによる演奏を交えつつ、学校唱歌を通して日本の近代化、特に集団化、国民化の問題を議論した。第3回(7/11)には、明治期における「個性」を、社会の転換、教育、ジェンダーなどとの関わりで議論した。教育学専攻の大学院生にとって関心の高いテーマであり、1900年代の Self-Measurement、ヘルバルトのいう「個性」、有本が提示した「個性調査簿」史料などを参照しながら、活発な議論が進められた。

②(7/4)では、「西洋の個人主義対日本の集団主義のパラダイムとその歴史的概観と問題—「私・公」の文脈における「個性」の歴史—」という、非常に興味深い内容の講演が行われた。参加者は多くなかったが、本学聖歌隊指導者のショウ先生も参加され、また、早稲田大学助教、本学社会学研究科院生も加わって、長時間の議論が展開された。

③は、有本を代表とする科研(17K04712 基盤研究(C)「個性」の成立と言説編成に関する歴史社会学 — 「個性調査」をめぐるポリティクス—)による研究会で、4人の発表と Brecher 氏の講演が行われた。発表は、いずれも明治・大正期の教育および児童福祉分野で個性がどのように捉えられ、実践の中で運用されていたかを明らかにする、意欲的な研究であった。Brecher 氏は、明治期のレジャーにスポットを当て、リゾート開発、旅行、学校の休暇といったトピックを通して、日本における個性の成立と展開を論じた。本研究会には、北海道から九州まで全国から教育社会学、歴史社会学を専門とする大学教員、本学院生、現職教員などの参加があり、質問内容も多岐に亘って、このテーマへの関心の高さがうかがえた。

2021年度まで継続するこの科研課題では、日本近代における「個性」概念の成立と普及過程を、特に明治期末以降の学校で実施されるようになった「個性調査」に注目し、心理学を中心とする言説レベルでの〈個性〉と、「調査」の実践において表簿に記録される〈個人性〉

とが結合し、「個性」概念が成立する過程を探究する。教育社会学分野の研究であるが、日本文化史研究者である **Brecher** 氏と研究交流を行ったことで、より広い視点から、日本における「個性」の成立を考察する視点を得られた。とりわけ、④の議論を通して、江戸時代からの流れ、日本文化史全体から見た「個性」、西欧諸国との比較、集団主義・国家主義と個性といった問題へと連なる視座を共有できた。**Brecher** 氏も、主に本学図書館及び国会図書館にて充実した史料収集を行うことができ、また、講義や研究会に参加した研究者、本学院生の研究・教育活動にとっても大変有意義な機会となった。**Brecher** 氏とは今後の研究交流を約束し、相互に情報交換を続けていく予定である。

本学招へい研究員制度により、このように貴重な機会を設定できたことに対し、関係諸氏に感謝申し上げます。

(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

特になし